【講演】クガドゥンのお話

國吉まこも

國吉まこも　はじめまして國吉です。先ほどの水島さんのアホウドリ、何度見てもやっぱり凄い。あんな風に尖閣にいるんですね。

それで、当時アホウドリを相当獲った、尖閣での乱獲の原因を作った古賀辰四郎さんという、八重山ではおそらく「クガドゥン」の名で知っている方もいるでしょう。この方のお話を少しさせて下さい。

クガドゥンこと八重山古賀商店

戦前の明治十五年、一八八二年頃に古賀さんは石垣島大川、現在の七三〇交差点の辺り、交差点の前を通ったら現在は駐車場や空き地になっている場所に古賀商店、クガドゥンを開きました。当時は桟橋のすぐ前、石垣島の玄関口になります。

尖閣でアホウドリを獲って羽毛が貯まったら、石垣島に持ち帰って、定期船などの蒸気船に積み替えるまでの間、他の海産物と一緒にクガドゥンに集めていました。

クガドゥンの主だった古賀辰四郎は寄留商人です。沖縄出身の方ではありません。明治になって九州の福岡県、その中でも八女市山内（やまうち）という山間（やまあい）の村から沖縄に来て、八重山に渡って海産物やアホウドリを獲るようになった。

さて、話をする前に少し付け加えますが、古賀さんが積極的に尖閣諸島を開拓するようになるのが一八九六年からです。それより以前、日本が領有宣言する前から地元の漁業者は尖閣に渡って、アホウドリの羽毛や夜光貝の貝殻を獲っていた。具体的な年代は一八九〇年から一八九三年です。尖閣諸島の領有が一八九五年一月ですから、その五年前には既に多数の漁業者が渡島して、数月滞在して海産物を獲っていた。そうして滞在の為の小屋を建てたり自給の為の芋を植えたりしている。アホウドリを殺戮したのは古賀さん一人ではない、という事です。

古賀商店は兄弟商店

しかし、そういった尖閣諸島開拓の歴史において、精力的に島を開発し最も利用した人物、これはクガドゥンの主、古賀辰四郎をおいて他にはいません。このクガドゥンの具体像を考えていきたいと思います。

クガドゥンこと八重山古賀商店は大川にありました。別に那覇の西町という所、そこにも古賀商店がありました。八重山の海産物やアホウドリの羽毛は、一旦八重山の古賀商店に集められて、そこから那覇の古賀商店に送られました。那覇店は今度は大阪にある古賀商店。これは古賀さんの兄が経営する店です。この大阪店に産物を送って、大阪店は当時神戸等にいる外商たちへ売り捌くわけです。外商はそれを海外の取引先や母国へ輸出する。欧州はドイツが最大の受け入れ先です。あとはロンドン、アメリカ。中国は香港。そういったところに沖縄、八重山の産物が輸出されていった。この流れを理解していただければと思います。

大阪店のお兄さんたち、名前を見ますと一番上の兄が古賀国太郎。次の兄が古賀与助、古賀辰四郎は三男にあたります。その下の弟に古賀光蔵という人がいますが、この方は八重山の古賀商店に勤めていて、八重山で亡くなりました。当時のお葬式の御礼広告が記録に残っています。これが古賀商店の概要です。

船酔いしない古賀辰四郎

古賀さんの人物像について、資料を見ると、まず船酔いに強かった点があります。

一九〇八年の事です、以前より尖閣諸島でアホウドリを獲ったり、カツオ節を作ったりと色々な事業を行なっていましたが、今度はいわゆるグアノという燐肥料。尖閣諸島には海鳥がいっぱいいますよね。先ほどの映像で見ました。海鳥はもちろんご飯を食べて、ウンコをします。「この溜まりに溜まった海鳥の糞がなにか肥料の材料になるらしい。これを利用してどうにか儲けられないか」という事で、東京から偉い先生、恒藤規隆という農学博士を招聘して、尖閣諸島の調査をしたんですね。この時の調査団は大所帯で、実業家一行に新聞記者、他に県庁の職員、玉城五郎、真境名安興、沖縄史の大家のこの方も資料によると参加しています。

そういった方々を引き連れて蒸気船で行った。船旅の途中の海の上、波に揺られながら、古賀さんは皆さんに開拓の苦労話を熱心にご披露します。だけど聴衆の皆さんは船酔いで話を聞くどころじゃあない。それで皆さん退散してしまい、あとには一人寂しく取り残されてしまった。「なんで僕の話を聞いてくれないのかなあ」と思ったかもしれません。これは同行した琉球新報記者の伝える記事にあります。

ですからおそらく船酔いに強かったと僕は思っています。

糸満人との親交と大東島の開拓

次に、海産物を取引する関係上、糸満の方々、いわゆる糸満人、沖縄の専業漁業者と親交があったのではないかという点。具体的に二人の名前をあげると、ナビサこと玉城保太郎。名前でお気付きの方いますね、水中眼鏡の発明者として有名な方です。そして玉城五郎、県の水産技手を勤めたあとは糸満町長になった方で沖縄の水産振興に尽くした方です。この方々と親交があった事、箕作佳吉という水産博士が沖縄

に標本の採集旅行に来た時に、古賀さんがナビサを連れて来て、一緒に採集の手伝いをしたりした、と報告に書かれています。

さて、古賀さんは当時無人島だった尖閣諸島を開拓した事は先に述べました。ですが、最初から尖閣諸島を開拓しようとしたのではありません。一番最初は大東島、南北大東島です。当時あそこにもアホウドリがいたかどうかはわからないんですが、そこを最初に開拓しようと許可御願いを出しています。これが一八九一年末の事です。そうして翌年に許可が下りて、大有丸、蒸気船をチャーターして糸満の漁師さんを引き連れて行くんだけど、海が時化てた所為もあるのか、現場についても上陸が出来ない。大東島は周囲が切り立った島です。散々上陸出来そうな場所を探すんだけど、出来ない。

しまいには糸満の漁師さんが音を上げた。「俺たちもう帰らせてくれ！」と。「今回は駄目でした。那覇に帰って来ました」と報告しています。再度古賀さんが挑戦したかはわからないんですが、一八九四年頃には開拓願いを取り下げています。そのあとで目を付けたのが尖閣諸島です。そうして開拓御願いを出して、開拓許可が通ったという流れになります。

大東島の開拓は古賀さんの後に何人もの人が出願しますけど、みんな全て失敗してしまう。結局成功した方は玉置半右衛門という、奇遇ですね。この方もアホウドリの乱獲者、長谷川先生の敵みたいな方なんですね。この方が大東島の開拓に成功しました。

一八九九年頃に開拓許可が降りて、地元八丈島から自分たちの帆船、蒸気船ではないです。それでもって沖縄に渡って那覇で開拓資材や食料を積んで大東島に向かう。

無人島経営者として

海洋丸という帆船で、玉置さんは大東島を行き来するんですが、この船がある時（一九〇八年）那覇—

慶良間間で座礁してしまった。これを助けたのが古賀さんの船です。古賀さんは当時台湾総督府から払い下げた辰島丸という蒸気船を持っていて、那覇―名護間を定期的に運航させていました。この辰島丸が海洋丸を助ける、離礁させた時に、玉置さん側は「御礼を申し上げたい」と、助ける際に辰島丸も損害が出ましたから、「その分でも賠償したい」と申し出たら……。

「玉置氏とは年来の懇意にてもあり、傍々無人島経営者として同憂同思の同業者間の出来事にしてはあり一切其の義には及ばず」

古賀さんが言うには、玉置さんとは長い付き合いで、無人島経営者として同様の苦労や憂いがあるだろうから、賠償とかそんな細かい事は考えなくて良いと言って、同船が大事に至らなかったことを祝したそうです。ですから何か、同業者同士の矜持、それが当時の思いとしてあったんだろうなと考えています。

そういった無人島経営者としての自覚というか、先ほどお話した燐肥料の調査の頃です。大勢の人が尖閣に行って、新聞記事にも色々と出る。琉球新報などは十一回に亘る連載で古賀さんの開拓を紹介した。「尖閣列島と古賀辰四郎氏」というもの凄く面白い文章があります。これを読んだ人は、「こんな面白い島だったら自分も観光したい」と新聞に問い合わせた。

古賀さんにその話を伝えたところ、「いやいやいや。そういう島ではないです（観光の島ではない）。自分たちは島の事業に忙しくて、観光客なんか相手している余裕は無いんだ」と言ってお断りしています。中々頑固そうですね。

性格は強情偏屈？

一体どういう性格だったのか、一九一六年に出された『沖縄県人事録』という人名年鑑に古賀さんの性格に少し触れている部分があります。ちなみに著者の秦蔵吉も尖閣に上陸した事があります。これを少し

見てみます。

実業家古賀辰四郎君は色々と水産業に成功しておるけども、「君の如きは真に代表的実業家と称すべきも、性強情偏屈にして人と容れざるは甚だ惜しむべきところなり」。人付き合いが相当悪かったのか、わざわざ書くぐらいですから、どこか一般の人とは違っていたんでしょう。

もう一つ、性格と言いますか、海産物商としても尖閣諸島の開拓者としても成功した古賀さんは、当時那覇でも有名人、成功者です。当時東京から政府の役人が来て、歓迎会をやって、併せて講演会も開く事になった。そこで、「尖閣開拓を一つ古賀さんに話して貰おうじゃないか」と、今日の催しのようなものでしょうか。講演をお願いしたらオーケーして、新聞に予告が出ます。「尖閣列島開拓の談　演者　古賀辰四郎」と、強情偏屈な古賀さんがじゃあどういう事を当日お話したんだろうかと楽しみになりますよね。わくわくしながら読んでみると、当日は別の人に譲ったと書いてある。

その時になってですよ。わざわざ段取りを組んで、古賀さんオーケーして、しかも本人会場にいるわけです。ところがいざ古賀さんの番になったら、「いや、この人の方が喋れるから」と言って、琉球新報の記者（宮田倉太）に代演させちゃった。この事も何か普通の人とは違うなあと、古賀さんの性格がうかがえたらと思います。

糸満人の不審火

他に『石垣市史民俗編』から各地区の概要の「東小屋」形成の説明を見ましょう。

「廃藩置県（一八七九年）後、尖閣諸島開拓の先駆者である古賀辰四郎氏は、その前線基地として宇大川の海岸近くに古賀支店を開設していた。当時、島民は、これをクガドゥン（古賀殿・古賀支店のこと）と特別な敬称をもって呼んでいた。古賀支店は海産物を一手に取り扱っており、いきおい、非常に強い異臭

を一帯にただよわせていた。一八八二年頃から糸満系漁民も渡来してきて、やはり小屋を建てて住んでいた。クヤーの数は五三も数えられるところをみると、かなりの漁民が住んでいたことがわかる。しかし、その糸満系漁民たちが鱶の脂をとるために作業していたところ、その脂に火がつき、附近のアダンに燃え移り、さらに、古賀支店までも延焼させるという一大事件にまで発展した」

糸満人の不審火によって古賀支店が焼けてしまい、糸満人たちは島の玄関口から追いやられて東小屋に移っていったというエピソードですが、不審火で思い出しまして、これも紹介します。時代は下って一九一四年頃にも別の糸満人の不審火があります。

今度は蒸気船の上での話です。那覇・石垣間の貨物船が石垣港に泊まっているんだけど、当時この船には石油缶を六〇〇個ぐらい積んでいました。糸満の人たちがその石油缶に向かって吸いかけのタバコをポイッと投げて、火が点いて船の上ではもう大騒ぎになる。爆発したら大変です。幸い急いで石垣港に全部放り込んだので、大惨事には至らなかったけど、この時の石油缶六〇〇個のうち四〇〇個の荷主は古賀さんでした。古賀さんと糸満人との関係に不審火が出てくるのは面白いと思います。

話に夢中で、写真の紹介を忘れていましたが、右が大阪古賀商店の広告です。住所は「大阪の長堀北通五丁目」、これが大阪古賀商店の場所ですね。左が那覇古賀商店です。他に八重山古賀商店。これら三店は全て「山」に三の商号を使っています。ですから兄弟商店と考えて良いと思います。

那覇古賀商店(左)と大阪古賀商店(右)の広告

開拓の概要

次に八重山古賀商店の取扱産物について考えてみます。

主な産物、まず一番は最初の番組で見たアホウドリの羽毛、他に先ほどの映像の中で皆さんお気付きになったでしょうか、アホウドリはモーモー鳴いて、その周りでキーキー鳴いている海鳥がいましたね、アジサシです。あれを大量に剥製にしています。海産物としては貝殻、フカヒレ、ベッ甲、スルメは取り扱っているんですが尖閣でやっていたかは判断出来ていません、あとはカツオ節などですね。

こういう産物を尖閣で獲って、八重山の古賀商店に集めていた。そうして一定の量になったら那覇の店舗に送る。古賀さんはそうして尖閣と石垣島を行き来して産物を輸出したんですが、具体的に輸送はどうやっていたのか、これを紹介したいと思います。

開拓の最初の頃は、「漁船を使って尖閣と八重山を行き来していた」と古賀さん自身の陳情書に書かれてあります。この時の陳情の内容は「段々開拓が本格化して送る荷物が多くなって、漁船だけで尖閣と石垣島を行き来するのは大変な状況です」と訴えている。それで「台湾総督府の命令航路にある蒸気船の一部、台湾まで行く船を寄航させて欲しい」と、当時航路を運行していた大阪商船株式会社に泣きついている。これが一八九九年一月一九日付の陳情書になります。

ですから開拓の最初は漁船で行き来していた。その後台湾航路の船が寄航するようになった。その後は開運会社*1の先島航路、続いて尚家が経営していた広運会社*2の同航路へと変遷していきます。

もう一つ、尖閣諸島に住民がいたと言われますが、住民は別に自ら望んでそこに移住したわけではなく、全て古賀さんが雇い入れた出稼ぎ住民です。出稼ぎ人募集の広告を新聞に出しています。たとえば一九〇四年八月九日付広告「無人島行広告」です。この時期は尖閣とも書いていません。無人島と書いてある。当時はそれで通用しています。

＊1 鹿児島商人が設立した海運会社。大有丸、仁寿丸などの蒸気船で、主に那覇―先島間の定期航路を運航した。仁寿丸は開拓の初期に度々尖閣へ寄港している。

＊2 琉球の旧主である、尚家が資本となり設立された、地元沖縄の海運会社。蒸気船球陽丸は開拓の中期頃、度々尖閣に寄港している。

藍綬褒章の下賜

開拓の写真を少し見ていきたいと思います。

これは一九〇八年燐肥料調査の時に撮影されたものですが、こういった方々が出稼ぎに行っています。面白いのは女の子が写っている、分かりますかね。中段中央です。この女の子は「一九〇一年頃に尖閣で産まれた」と戦後に本人が語っています。伊澤弥喜太という方の娘さんで、伊澤真伎と言います。真伎さんを抱いている方がお父さんの弥喜太です（一九〇八年の写真、高橋庄五郎著『尖閣列島ノート』参照）。

弥喜太は尖閣諸島の領有以前一八九一年から一八九三年頃に自ら漁業者を率いて尖閣に渡って海産物を獲っていて、その後古賀さんが尖閣諸島の開拓を許可されたので、古賀さんに雇われて現場監督、開拓の指導をする立場にいた人です。一九〇九年頃まで尖閣にいたが、その後は台湾に渡ったりして尖閣との縁は切れてしまいます。写真の奥の方には「黄尾島古賀開墾地」と書いてあります。ですからこの写真は現在の久場島で撮影されたものです。開拓者の方はシャツを着けていたり、鉢巻きしていたり、そのような方がいます。

黄尾島古賀開墾地にて（1908年）

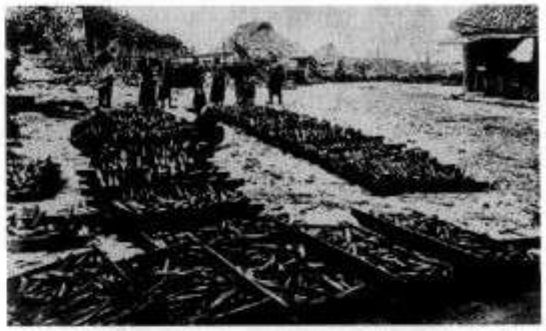
魚釣島での記念写真（1908年）

一九〇八年頃の魚釣島です。右の石垣に囲まれた小屋はカツオの煮炊き小屋です。これを前にしてでっかい日の丸を立てて、左側には女性の方々、おそらく当時古賀さんが四国の土佐から雇い入れていた節削りの女工さん。真ん中のちょっとええ格好した人たちが当時島に見学に来た実業家の皆さん、学者先生。右側の小屋の前にいるのは、おそらくカツオ船の釣り手、漁業者たち。小屋の前に立てかけてあるのはカツオの釣竿でしょう。

同じ頃に撮影された写真です。①はカツオ節工場の中です、当時このような規模で作っていた。結構な数のセイロにカツオ節が並べられています。②は煮炊き小屋の中を写しています。中に大きな丸い釜が据え付けられて、三つぐらい並んでいる。当時はこのぐらいの設備を備えていた。そうして奥に一人自慢げなのが古賀さんです。そして③、この頃は沖縄の人も、内地のカツオ釣りの漁師さん、削りの女工さんも島にいる。各地方から古賀さんが雇い入れて来た、色んな方々が島にいました。この人は三味線を持っています、島の暮らしの慰めにどんな曲を弾いたのでしょう？

古賀さんは一九〇九年に藍綬褒章を下賜されました。一八九六年に開拓を開始してから実に十三年をして、ようやくその苦労が国にも認められたわけです。

翌一九一〇年、新聞紙上に古賀さんの功績を称える投書を、友人の緑堂がしています。長文ですが大好きな一文なので、紹介します。



①カツオ節の製造風景(1908年)

②カツオの煮炊き小屋(1908年)

③左端から二人目、三味線を持っているのが古賀(1908年)

「古賀辰四郎君、此の度、藍綬章を授けられたる吉報に接し、余は友人として深く君の光栄を慶す。君が尖閣列島を経営するの初に当りてや、人多く之れを危み、甚しきは密に指笑するものありしを知る。絶海無人の孤島、其業たる実に容易ならず。

報酬を厚くして漸く労働者を得、汽船を賃してかろうじて食料を供給し、新に岩礁を砕て舟の碇泊場を設け、或は野菜を栽て不時の用意に供ふる等の困難に加うるに、鳥毛の採取より鳥類の剥製に変じ、貝類の漁労は鰹船の製造となり、事業の曲折、又た苦心の少からざりしことを見るに足る。

今は経営其の緒に付き更に一大利源の発見ありて大発展の域に達せんとし、漸く人に羨望せらるるに至

れるも、君の如き熱心精力、人に超越したるものなきに非は終始一貫、此の孤島を玉化せしむるに堪えじや否、俄に期すべからず。此の如き苦境を経て、茲に成功の一端を国家に認められたる君の喜、余は遙察に余りあるを知る。

今にして　人もうらやむ浦島か
　このよろこびに　あへる君かな

君が画ける未来の金殿玉楼は乙姫の昔語りに非ず、必ず現実すべきを信じ、且つ国家の為に之を訴るもの也。　緑堂　—。」

種々の苦労、労働者及び生活物資の調達とそれらの移送。事業の変遷、夜光貝採取から鰹漁へ、アホウドリの羽毛採取はアジサシ類の剥製製造へ。緑堂こと護得久朝惟が友人として広運社の社長として島の開拓を見守ってきた事がわかる一文です。

まとめ

古賀辰四郎は積極的に尖閣諸島を開発しました。お話した通り、色々な方を雇い入れて、島は発展を遂げます。しかし開拓の途中、一九一八年八月二十八日に亡くなりました。その後は息子の古賀善次が家督相続し、古賀商店の経営及び尖閣諸島の開拓を受け継ぐんですが、この方の代になると尖閣の開拓が熱心にやられた形跡が、余り資料からは見えてこない。善次自身が尖閣に上陸した事があるかも疑わしい。

善次の奥さんの花子さん、戦後にこの人を新崎盛暉先生がインタビューしていて、花子さん曰く「余り商売熱心ではない」というより別の方面に熱心だった。ただで地元新聞の運動部記者になって、ベルリンオリンピックに自前で取材に行ったりする。あと八重山の戦前の新聞に、善次が来島した記事があるんですが、肩書きは新聞記者です。クガドゥン、古賀商店の主とは名乗っていません。

ただ、国有化される前の地権者に、戦後善次が尖閣諸島を譲渡する際の条件として、「島の自然を残すように、手を付けるな」と言って、そのような形で地権者は島を所有しているそうですから、ひょっとしたら父辰四郎が乱獲したアホウドリやアジサシ類への贖罪意識があったかも知れません。

そのような中、古賀商店は一九四〇年に一旦解散しますが、戦後に元支配人の照屋清栄らが業務を引き継ぐ形で南海商会という貿易会社が設立されます。

一九七二年の復帰頃までは南海商会は営業していますが、現在は跡形もありません。戦前のクガドゥンのあった場所、あそこにはもう何も無い。時間になりましたので終わらせていただきます。ありがとうございました。

【補足資料】古賀商店の支配人について

【八重山古賀商店の支配人や主なる関係者】

◇伊澤弥喜太：熊本県の人、尖閣諸島開拓の指導監督にあたったと考えられる。

参考：一九〇〇年『地学雑誌第十二輯一四三号』（「黄尾島」）より

石垣市商工祭に南海商会が参加した際の記念写真（1956年）
山車やカツオを模した燈籠から当時の業務内容がうかがえる
写真提供：田盛典子・那須從子（照屋清栄孫）

「現今黄尾島に移住し居る、熊本縣人伊澤矢喜太の供述に依れば、同人は去明治廿四年より魚釣島並に久場島に琉球漁夫を引つれ渡航し、海産物と島上の信天翁とを採集せり。當時にありて航海は、單に刮舟又は伝馬船によりしに過ぎず。而して島には永く留ることなくして、石垣港に歸來せり。次て明治廿六年再び同島に渡航し、歸路颶風に遭ひ清国福州に漂着し、辛くも九死の中に一命を助かりしと云ふ」

また娘の「伊澤真伎」は黄尾島で生まれたと自身で語っている。沖縄県八重山郡尖閣諸島生まれという事になるか。真伎によると一九一〇年頃に故郷の熊本県に帰って後、父弥喜太と共に台湾に渡ったそうである。

◇尾瀧延太郎：出身地不詳、古賀の甥。

この人も尖閣諸島開拓初期の指導にあたったと考えられる。一八九八年より開拓者を率いて渡島している。また製図の才があったのか、当時にしては詳細な魚釣島の地図を作成している。

参考：一九〇〇年十月一日付琉球新報記事『寄留商人案内（二）』

「―古賀辰次郎氏は大分県の人にして実兄古賀与助氏は大阪にあり。商業は重に海産物なるを以て久しき以前より糸満人を雇ひ無人島附近に於て漁猟をなさしめ且つ開墾事業を企ち居れり。古賀商店の支配人は尾瀧円太郎氏にして同氏は此程商業視察の為め古賀辰次郎氏と支那へ渡航し同地に於て英語研究の必要を感じ目下京都に於て勉強中なりと云ふ」

◇堤　米吉：福岡県の人、忠見村は山内村の隣村。八重山古賀商店支配人か

『石垣市史八重山史料集二　豊川家文書一』に松村仁之助と古賀辰四郎代理人堤米吉の二人に紅露（自生の染料の一種）の採掘許可が下りている事（明治三十六年三月三〇日付）が記されている。古賀の事業は八重山の農産物に対しても積極的に展開されていたと考えられる。また、登記簿等の資料によると、古賀商店があった大川の番地の所有者として、堤米吉、同イシの名が見られ、岩崎卓爾著『石垣島案内記』に

は当時（明治末期）古賀支店の支配人は堤て口子氏だと記されている。

◇**古賀光蔵**：福岡県か？　古賀兄弟の末弟。尖閣でのカツオ漁の指導をした可能性がある。

参考：一九一一年二月十一日付沖縄毎日新聞葬儀広告

「弟光蔵予而病気之処養生不相叶昨十日午前十時八重山に於て永眠致候間此段生前辱知諸氏に謹告仕候也追而葬儀は本日八重山に於て執行致候　明治四十四年二月十一日　実兄　古賀国太郎　古賀与助　古賀辰四郎」

◇**嶺岸佐多之佐**：宮城県の人、のち沖縄県に転籍。

一八五六年十二月生とあるので、古賀と同い年である。一八八三年頃沖縄県属となり明治一八九三年頃より八重山へ赴任。大正初期に退官して八重山古賀商店支配人となる。明治末期の八重山役所書記在任中より、イカ曳きを趣味とする様が太田朝敷の先島紀行に見られ、海月会（八重山で一〇〇年以上続くイカ曳き愛好会）との関係がうかがえる。

先島新聞上で「ハイカラ」とあだ名されているが、このあだ名を想起させるエピソードを以前高良鉄夫博士から幼少時の思い出としてうかがった事がある。『クガドゥン』という言葉を聞くと、蓄音器の事を思い出す。あそこには当時大変珍しい蓄音器があって、（当時）子どもらはみんなで物珍しく見に行ったものだ」。また当時の古賀商店北二軒上にある坂田商店（店主坂田安次郎）は古賀店のライバル店だった。坂田の遺した著述には嶺岸支配人の事が記され、当時の商店主同士の交流がうかがえる。

◇**照屋清栄**：沖縄県那覇の人

那覇商業学校を卒業後、那覇の古賀商店に入る。のち八重山店へと転任、嶺岸支配人の下についた後、嶺岸氏病没後後任の支配人となる。

戦後南海商会を立ち上げた人物である。当時の八重山古賀商店広告に、照屋清栄、伊地柴賛、喜舎場孫正、大濱孫祥、比嘉太郎、具志忠一、黒島安助（一九二九年一月一日付先島朝日新聞）の名が見られる。

◇**金城良興**：沖縄県首里の人、尖閣・新川鰹節工場長

いつ頃八重山に来たかは不詳だが、カツオ節の製造監督として、当初は尖閣諸島で、尖閣を引き払ってからは新川の工場で監督を務めたそうである。当時のカツオ船古賀丸の名は新川方面の糸満人古老の方々から聞かれる。子息の金城良正氏は石垣島にご健在で、趣味のイカ曳きを楽しんでいる。

左は八重山古賀支店長、照屋清栄、右は大阪古賀商店長、古賀与助（古賀辰四郎の兄）。
戦前の八重山と大阪、両店舗のつながりを示す貴重な写真資料（1926年）
写真提供：田盛典子・那須従子（照屋清栄孫）

おわりに

沖縄の八重山諸島には近代になって、日本各地や台湾等から様々な人々が移り住んだ歴史がある。現在八重山合衆国と呼ばれるのもその由縁だろう。

尖閣諸島に関わった人びともまた多種多様であった。同諸島の歴史は近代日本人の躍動と決して無縁でない事を感じて頂けたらと思う。